

歴史人物の更年期 時期の推定の試み

よこすか女性泌尿器科・泌尿器科クリニック(神奈川県)

奥井 伸雄

● 歴史人物から紐解く男性更年期の理解

男性更年期は、テストステロンの低下が原因として引き起こる諸症状をいう。勤労意欲の低下などがあり、漢方での治療は、「気虚」として、補中益気湯(虚)、八味地黄丸(虚一中)、六味地黄丸(虚一中)と使い分けることが多い。男性更年期は決して現代だけの病気ではない。

そこでわれわれは、男性更年期症状を有する患者への理解を深めるため、歴史人物の更年期についての検討を行なった。本稿では徳川家康を題材に、彼の戦歴を点数化した。そうしたところ、徳川家康は長年のストレスで天正6年(33歳)から天正9年(36歳)において活動性が著しく低下していること、さらには、その時期に曲直瀬道三による漢方治療を受けていたことが明らかになった。

図1に徳川家康の初陣(永禄2年)から豊臣秀吉による統一(天正12年)までの『徳川実紀』¹⁾の戦歴について、その規模により10点満点で評価したものを示す。天正6年(33歳)から天正9年まで戦争が極端に減少している。この時期徳川家康の歴史をみると、次ぎのエピソードがある。(1)長篠の戦い(天正3年)にて宿敵武田勝頼が織田信長に滅ぼされ、この事実から徳川家康は織田信長との上下関係が確立している。(2)『徳川実紀』で徳川家康の長男信康の活躍が目立って記載されていたが、その信康は信長の

命令にて切腹をしている。(3)天正6年に曲直瀬道三²⁾に出会い、頻回に診察を受けている。

図2に徳川家康三方ヶ原戦役画像を示す。男性ホルモン量の推定に、右手の2D:4D ratio(2D(人差し指):4D(薬指)ratio(比率))を計算すると、0.92である。テストステロンは天正4年(31歳)の年齢よりも高い値であることを示した。



図2 徳川家康三方ヶ原戦役画像
右手が正確に描写されており、2D:4D ratio(2D(人差し指):4D(薬指)ratio(比率))が計算可能である。
徳川美術館所蔵
© 徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

● 男性更年期への漢方アプローチ

男性更年期は、比較的若年層も受診する。徳川家康は30代で発症していたと考える。実際に彼に男性更年期特有の症状が出ていたかどうかは、『徳川実紀』には政治的な意味があり記載はされていない。しかし、戦争を控えていたのは事実である。現代では、若年の患者の男性更年期特有の症状において、漢方の有効性が認められている。徳川家康の薬は「八の字薬」と記録されており、『和劑局方』³⁾の「無比山薬丸」の加方・変方である。無比山薬丸は、地黄、山茱萸、山薬、沢瀉、茯苓、五味子、肉苁蓉、杜仲、牛膝、巴戟(天)、免絲子などで構成された八味地黄丸の変方である。徳川家康は、八の字薬に海狗腎を加えており、男性更年期を意識した処方を受けていたことが推察できる。曲直瀬道三は『黄素妙論』⁴⁾など性と社会的活動性について研究している。このことから曲直瀬道三にも、男性更年期の治療に似た概念があったと考える。

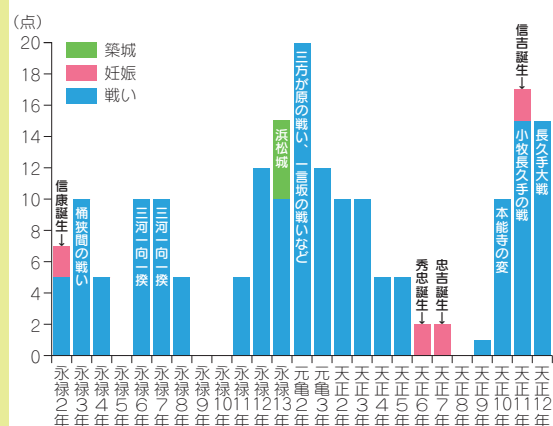


図1 徳川家康の初陣から豊臣秀吉による国内統一までの戦争データ

【評価方法】

戦いは、徳川軍11,000人以上が参加して武田信玄軍と戦い大敗した「三方ヶ原の戦い(元禄2年)」を10点とし、これを評価基準とした。たとえば、今川義元の先方として参戦した「桶狭間の戦い(永禄3年)」では負担が大きく、織田軍に破れて撤退しており10点とした。一向一揆も家臣団が分裂して半数に減らすなど消耗が大きく10点とした。また、吉良義明との戦い(永禄4年)は、参加人数の詳細はわからないが少なくとも5回前後の戦いがあり、1つの戦いを1点として合計5点とした。

【注 釈】

- 徳川実紀(とくがわじつき): 徳川家康から10代将軍家治までの治績、逸話を記した全485冊からなる江戸幕府が編集した正史。
- 曲直瀬道三(まなせ・どうさん): 永正4年~文禄3年。“日本医学中興の祖”とされる。明代中期の医学を大成して、現代の弁証論治とは同義の“察証弁治(さつしやうべんち)”を確立し、後に後世派と呼ばれる流派の祖となった。
- 和劑局方(わざいきょくほう): 宋代に中国各地の処方を集めてまとめた官製処方集。日本漢方で頻用される処方が数多く収載されている。
- 黄素妙論(こうそみょうろん): 曲直瀬道三が記した性の指南書。